

金森家住宅

江戸（現在の東京）幕府が石見銀山を直接管理に置いて行政官に監督させていた江戸時代（1603～1867 年）、郷宿は社会の一部でした。行政官は、鉱山そのものだけでなく、150 ほどの村々を含むその周辺の土地も管理していました。こうした村々の住民は、奉行所で公務を行うために大森の町へ出かける必要がありました。このため 1700 年代の半ばには郷宿のシステムが確立し、このシステムの下で村々は 6 つのグループに分けられました。各グループが一つの郷宿を割り当てられ、村々からやってきた人々が大森に滞在中はそこに宿泊しなければなりません。奉行が大森の豪商の一族らにこの業務を請け負わせ、この郷宿は代官所から出された法令等を各村々に伝達する役目も負いました。金森家住宅は、6 つの郷宿の一つで、1850 年頃に建てられました。この建物は広々とした 2 階が特徴的で、数十人の客を宿泊させることができるばかりか、小さな茶室までありました。この家は造り酒屋や、奉行所からお金を借りるために大森へやってくる人々の宿としても使われたため、広いスペースが必要とされたのです。金森家は一般公開されていません。